

## 問いと活動の往還で 探究の質を高める バラモンプラン

第20回 五島高校(長崎・県立)

取材・文／江森真矢子

東シナ海に広がる五島列島、人口約3万4000人の福江島にある五島高校では、4年前に総合的な学習の時間を大きく変えた。スタートした「バラモンプラン」は身近な地域の課題から自分の将来を考え、社会で活躍できる資質・能力を身につけ「五島

に戻ってきて活躍する」「五島に戻ってこなくても五島のことを考える」生徒を育てるキャリア教育だ。  
校長から担当を任せられた榎本英人先生は「学校が生徒を囲い込み勉強だけさせてほんとうに将来を生き抜く力がつくのか、ずっともやもやしていました。これから必要なのは自分で考える、自分で企画する、そして実行する力ではないか。学校と社会がシームレスにつながる方法はないかと考えていました」と言う。

初年度に実施したのは、1年生で五島の現状を知って五島を元気にするアイデアを考え、2年生で「仮想五島市長選挙」に向けて8つの政党を作り投票まで行うというプログラム。市や議会、地域振興局、大学などと協働し、生徒がたくさんの大人と関わるのが今にも続く特徴だ。  
「地域に出て課題だけ見つけてくる」というものも多かったのですが、生徒たちの反応は『学校でこんなことやっ

ていいんだ』『楽しい!』と肯定的で、手応えがありました。ただ、生徒は思ったよりも五島を知らず、視野が狭いこともわかりました」

そこで、翌年は1年生で島内外から講師を招く講演会を10回実施し、たくさんの方と社会課題に触れることから始めた。そして、3学期から2年生にかけて「自分の好きなこと」と「社会」の重なるところから研究テーマを探す「社会探究型課題研究」に内容を変更した。

地域課題に取り組み行動力ある大人と出会うと、「何か自分たちにもできるかもしれない」と火のついた生徒たちは動き始めた。動き始めた先輩や同級生を見て、次に続く生徒が現れた。そして今、五島高校には小さくてもアクションすることから自分たちの作りたい社会を作ろうと、生徒発のプロジェクトが続々と生まれる文化が根付きつつある(下参照)。

何をしたいの? なんで? 問いを立てる対話が起点

プロジェクトの一つは、廃校になった小学校を会場にしたリアル脱出ゲーム。地域の小学生から大人までが混在するチームで謎解きをするというもので、約50人が参加した。

授業で大事にしたのは問いを立て

### ■ 海洋トマトドローンレース大会(チームGOTONE)



趣味でドローンを飛ばしていた生徒たちが、海の清掃活動をするサーファーと出会ったことから、海洋ゴミの調査をしていた同級生たちとタッグを組んでドローンレースを主催。競技を行う海岸を参加者と清掃してその様子を撮影し、ネット上に公開することでより多くの人に現状を知ってもらうことを目指す、ゴミの調査と啓蒙を兼ねたイベント。

### ■ 五島高校生環境シンポジウム(チームmaiPLA)



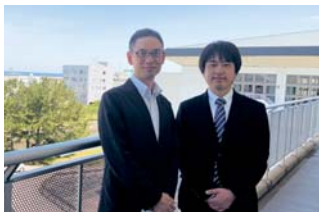
ビーチクリーンやゴミを使ったアート作品作りなどに取り組んできたチームの集大成。SDGsについて考えるワークショップや、環境に関する宣言文作りなどすべて生徒の企画で実施し、当日は地域の大人や高校生約120人が参加。チームmaiPLAは、全国ユース環境活動発表大会環境大臣賞等を受賞している。

### ■ 五島ピザ



農産物をそのまま出荷しても儲からない、担い手が減っている、という現状を知り、付加価値をつけることで一次産業を盛り上げるプロジェクト。ご当地グルメで地域を活性化しようと、飲食業に就く1ターン者と共に開発したピザは、特産のキビナゴやトマト、高菜を使ったもの。島内でイベントをするだけでなく、東京の物産展でも販売をした。

「社会探究型課題研究」を標榜する五島高校の総合的な学習の時間「バラモンプラン」がスタートして4年。授業は週1時間と少ないながら、課外の時間を活用して、地域でイベントを開催するなどダイナミックな活動が数多く生まれています。自ら動き、社会に働きかける生徒たちはどのように育ったのでしょうか。



写真右から  
櫻本英人先生、辻 忠先生  
(パラモンプラン運営委員会)



写真右から  
内海伶美さん、中村竜也さん、  
森 心太さん、川端涼太さん、  
泉 理菜さん、中村憲貴さん、  
福島通明さん

## ■ パラモンプランの年間スケジュール

|    |                     |  |
|----|---------------------|--|
| 1年 | 1学期<br>【地域と社会を知る】   | <ul style="list-style-type: none"> <li>● ガイダンス／社会を知る(業界地図を使ったワーク)</li> <li>● 五島市を知る(五島市の方の講演)</li> <li>● 財政教育プログラム(財務省の教育プログラム)</li> <li>● パラモンセミナー(社会人講演会)</li> </ul>           |
|    | 2学期<br>【視野を広げる】     | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 社会と接点を作るセミナー&amp;ワーク</li> <li>H29年 パラモンプラン講演会</li> <li>H30年 ばらかもんプロジェクト(五島に熱い人への聞き書き)</li> </ul>  |
|    | 3学期<br>【テーマと問いを考える】 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 成果物作成</li> <li>● 社会探究型課題研究のテーマと「問い」を考える</li> </ul>  |
| 2年 | 1学期<br>【アクション①】     | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 社会探究型課題研究のテーマと「問い」を考える</li> <li>● 「問い」を検証するためのアクション①</li> <li>● 中間発表①(6月)</li> <li>● 「問い」を検証するためのアクション②</li> <li>● 中間発表②(7月)</li> </ul> |
|    | 9月                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「問い」を検証するためのアクション③</li> <li>● 中間発表③(9月)</li> </ul>  |
|    | 10月                 | ● パラモンバトル(最終発表会に向けた校内選抜会)  |
|    | 11月                 | ● 最終発表会(MY PROJECT AWARD校内選抜会)   |
|    | 12月                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 修学旅行でブラッシュアップ</li> <li>● レポートをまとめる</li> </ul>   |
|    | 1月                  | ● レポートをまとめる  |
|    | 2月                  | ● レポート集完成  |

## ■ 学校外の学び「パラモンプラス」取組例

- ・ ども大学〜かまぼこ学〜
- ・ ベンチ塗りWS
- ・ 観光アイランド(長崎大学・横浜国立大学と)
- ・ 土壁を塗ろう! 有川邸土壁WS
- ・ 長崎海洋大使スコットランド派遣
- ・ 石田城周りの街路デザインWS
- ・ DIG ビジネスプランコンテスト
- ・ 長崎大学地域医療セミナー inGOTO
- ・ 武家屋敷に私たちの庭園を  
〜松下邸跡地手入れと戦略作りのためのWS〜  
※WS=ワークショップ

### School Data

1898年創立 / 普通科普通コース・スポーツコース、衛生看護科 / 生徒数498人(男子224人、女子274人) / 進路状況(2018年度)大学短大116人、専門学校11人、就職3人、その他3人

ること。自分が何をしたいのか、世の中をどう変えたいのか。「どうしたいの?」「何のために?」という生徒同士の対話を3カ月間繰り返すことから始めている。「世の中は答えのない問いばかりです。例えば地域医療というテーマでも、何が問題なのか、何に着目したのか、自分の言葉で問いにしよう、と生徒に伝えました」。

前述のリアル脱出ゲームを企画した生徒は「最初は地域活性イベントをしたい!だけでした。でも、何のため?と島の人たちにも、何度も聞かれまして。今のコンセプトは、縦のつながり作り。年齢を超えた交流が五島を明るくする、それが僕たちの目指す『活性化』です」と言う。

くする、それが僕たちの目指す『活性化』です」と言う。

2年生の授業の時間も基本的に発表や対話の繰り返し(左図)。約20時間の授業中に行うのはチームでの相談、振り返り、中間発表などで、実践活動はすべて課外で行う。いつまで何をやらなければいけないのか、ホームルームで担任から声かけすること全体を前に進めている。

### 地域の大人とつながると生徒は自走し始める

地域との関わりが深くなってきたから、同校には大学や地元諸団体が主催す

るイベントへの誘いが舞い込むようになった。こうした学校外での学びの機会は「パラモンプラス」として、生徒に参加を呼びかけている(左図下)。

武家屋敷の清掃活動をした生徒は、この場の活用方法はないかと問われ先輩の開発した五島ピザを売るプロジェクトを立ち上げた。活動を支えるのは「地域の人とつながる、しゃべるのがむっちゃ楽しい」「別のワークショップでピザの話をしてたら『絶対売れるよ』って言われてすごく嬉しかった」といった喜びや達成感。一度やったら終わりではなく、観光客用のパンフレットを企画するなど次の一手を考え続

けている。

「地域の大人とつながると、生徒は勝手に走り始めます」と言うのは五島出身の辻 忠先生。担当する今年の1年生は、講演を「五島に熱い地域の人」にインタビューし、冊子にまとめる「ばらかもんプロジェクト」に変更した。「ばらかもん」「パラモン」とは五島の言葉で元氣、活発な人を意味する。生徒を学校に縛りつけずアクションを促す、活動をする問いが深まり、問いが次の活動を生み、大人の叱咤激励が活動を継続させる。五島高校のパラモンたちは、こうしたサイクルに支え、育てられている。